

については一時間に19、35の乱れを示すものもあり、また全く乱れないものもあつた。語いについては、一時間に使用した数が最少92、最多179と個人差が多くみられた。

2、生活経験発表をさせる時、幼児は自分の考えを、どういつて相手に伝えたらよいか知らないことが多い。その時に保育者が助言し、話を誘導することによって発表力を増すことができる。最初はただ一つの単語でしか発表できなかった幼児も、回を重ねて誘導を受け助言されることによって単語数を増し、使用する品詞の種類も多くなり、体系的な表現法を用いることができるようになった。

3、童話の理解度は、話の内容に対する興味と深い関係をもつていて、ことばの理解と同時に、話の内容を印象づけられることの場合によって左右される点に注目させられた。知能の高いものが必ずしも再生度が高いとはいえないが、再生度の高いものは何回のテストに対しても得点が高く、知能の低いものは相変らず低いという点には注意する必要があるようだ。また、話し手は、子どもと親密な関係にある者ほどよく、馴染みの少ない人から聞かされた話の再生度は低い傾向があるようだ。しかし、保育年数が多くて、話をきき経験を数多くもつていた者は、きき方が上手で、話者を選ばないように見うけられた。

(大会発表論文抄録55—56頁)

童話に対する幼児の関心の一考察

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西憲明
梅田晴美

目的 他人のお話を聞くとともに、これに興味をもつて理解しようという態度を培うことが、幼児の思考を伸ばすのみならず、経験を深め、想像活動を豊かに発展させる。しかし、問題は、童話がどういう内容を持ち、どのように構成されており、しかも基本的には、なにを幼児に訴えるかという意図が、かれらの発達的特質に適切な形で表現されているかどうかである。従来から、こういう面で、健康で明るく、親しみがもて、適度の活動性を伴い、反復をもち、知識欲を満足させ、しかも情緒的に訴える芸術的のうのおいもち、道徳性を見えるとともに、空想性を誘発するものがよいとして、選択の基準にされた。だが、こういう基準を理論的に、かつ抽象的に設定することは容易であつても、おとなとは異つた心性をもつ幼児自身にとつて、どのように印象づけられ、理解されるかという点が明らかにされないかぎりには、大きな価値がない。

従来から幼児の童話的関心・空想の実験的研究が多く試みられているが、実験法自体に多くの問題があり、その実施結果の考察にも飛躍的なものが潜んでいる。ここでは、今後の研究の出発点として、一応次のような実験を試みた。

方法 童話実演によってあたえられた印象的效果を、実演直後に再生的に表現させることによつて、どういう構成要素がどのような連関において記録されているかを見ることにした。

手続は、すべて集団的にお話を聞かせ、これの再生は個別的に行ない、被験者は正常幼児三―五歳級を対象とした。実験は第一条より第五条に分けた。

(一) まず幼児の生活に即した話材を用い、これを標準語で平板に話したテープ録音で三分間聞かせたが、ほとんど再生的応答を示さず、基本的には童話事態にはいるものが極めて少なかった。

(二) そこで、言語的応答による話材の再生の困難さを除去するため、クレオンで聞かされた話を描かせながら再生的に説明させた。話材は関秀夫作「白いマント」であったが、これは変化の乏しい単調な構成であるとともに、高度の詩的空想を扱ったものであったため、その再生はきわめて断片的なものであった。

(三) したがって、幼児の日常見聞する身近かな動物を登場させた櫻葉勇作「ライオンをたべた山羊」を用いた。結果は狼が山羊をたべにきたとか、山羊が新聞をみつけたという、全文脈の特定の場面のみが再生され、特に男児には狼の出現とその攻撃動作、女児には山羊の静かな生活状態の印象が強いようであった。

(四) この動物(狼、山羊)については、既に屢々童話、絵本で経験しているため、この影響がこの場合の再生効果にも及ぼしていると思われた。そこで、動物は登場するが、かれらが自然に遊んでいる情景を描いた川崎大治作「ブランコ」を用いた。(五)更に幼児の生活を扱った小出正吾作「紅雀」を用いた。結果はやはり断片的な人物、事物の単なる再生が多く、全体的な話の文脈によって規定され、体制化されたものではなかった。

結語と考察 再生法自体に問題があるが、幼児に強い情緒的刺激を与える登場人物とその行動か、かれらが日常経験する事物かがよく印象づけられ、作者の意図する詩的、芸術的、保育的表現は、そのままのかたちでは理解されない。従って、実演童話の選択は、実演時の条件は一応除外すると、幼児自身の生活の具体性、時間性、直観性という現実度の高い次元において考慮されねばならないであろう。
(大会発表論文抄録22頁)

幼児の「死」についての調査

駒沢大学 内山憲尚

調査の動機 最近の幼児向き教材(童話・紙芝居・スライド等)

の中には原作の筋を改作して、悪い狼や、鬼などが最後に死んでしまふような話をことさらに改作して、悪い狼や鬼などを死なせないで、謝罪させて仲よしの友達になつて一しょに遊ぶというような結末にしているのが多くなつて来た。(「七匹の小山羊と狼」「三匹の豚」)或いは原話では慈悲深い爺さんが、宝ものを貰つて帰つてくる。無慈悲な婆さんが、真似をして失敗をするというような昔話を、ことさらに、よい爺さんが、宝ものを貰つて来て、婆さんと分けるという筋だけでやめているようなものなどがある。(「舌切雀」「団子地藏」等)またひどい紙芝居になると、舌切雀の欲の深い婆さんの貰つて来たつづらから蛇や蛙の代りに、雀が数百羽とび出して来て婆さんにおそいかかっているというのがある。

一体幼児は「死」というものについて、おとなが考えるようなセンチな考え方をするものであろうか。

調査の方法 面接説問法により一人ひとりの幼児に答を求めた。まず「死」について年長組一七〇名について

① 死んだらどうなりますか。「わからない」というのが九五%で、殆んど「死」ということに無関心であるということがわかる。

② 死んだらどこへゆきますか。「知らない」という無関心的態度が五八%を占めている。「お寺へゆく」という子どもは、肉親者中